

阿川佐和子氏と戸羽太市長の対談・抄

(この記事は、「週刊文春」2011年6月2日号に掲載された「あの陸前高田がすばらしい街になった犠牲者のために、そう思われる街にしたい。」からの抄録です)

阿川 あの大地震から2カ月経ちましたけど、今、戸羽さんはどこでお仕事されているんですか。

戸羽 このプレハブ小屋の横に立っている災害対策本部にいます。本来は給食センターなんですけど、市庁舎が津波でやられてしまったので。このへんは高台なので、津波からは逃れました。

阿川 戸羽さんは市長に就任して1月でこの震災に遭われて。

戸羽 そうです。2月6日に当選して、14日が初登庁でした。それから1月足らずで。でも、これが私の運命だったんだと思っています。

阿川 ここに来る前に海岸沿いを歩いたんですが、鉄筋のビルがぼつんぼつんと残っているだけで、あと積み上げられた瓦礫の山以外は、本当にすっかり・・・。

戸羽 市の人口2万4246人のうち、現在、1099人が犠牲になっています。686人の方々の行方が、いまだ分かっておりません。

阿川 改めて、戸羽さんご自身の、3月11日のことを伺わせていただけますか。

戸羽 市長になったばかりでほんとに忙しくて、家族とも全然一緒に過ごしてなかったんですよ。それがあの日は珍しく早く帰れそうだったので、女房に電話して「焼き肉でも食いに行くか」「じゃ、子どもたちが小学校から帰ってきたら聞いて、あとでメールする」って話をしたんです。それが携帯の記録を見ると午後2時40分、地震の6分前でした。

阿川 地震の瞬間、戸羽さんはどこに？

戸羽 市長室です。凄まじい揺れで、棚やテレビも全部倒れたので、職員に「いったん外に出ろ」と指示しました。で、こういうときはルール上、災害対策本部を立ち上げて、私が本部長になると決まっているので、まずは会議を開きたかったんです。でも庁舎が傷んでいるかもしれない、などと話している間にも大きな余震が来て、そして防災無線で「大津波警報が出た」と。

阿川 で、庁舎の屋上に逃げられたんですね

戸羽 そうです。職員や、避難してきた市民の人たちと一緒に。でも、そこからまた「まだあそこのおじいちゃんやおばあちゃんがいる」と助けに行った職員は、皆流されてしまった・・・。

阿川 ああ・・・。

戸羽 屋上にも水が迫ってきたので、みんな屋上に建っている倉庫によじ登りました。最初に津波が来て、一旦引くでしょう。そのとき、海のほうに流されていく瓦礫にお母さんと息子さんが乗っていて、「助けてー！」って叫ぶのが見えるんですけど、「掴まってろよー！」「頑張れよー！」と言うしかない。人間の無力さを感じました。

阿川 ……。

戸羽 結局、津波は5回くらい来たと思います。

阿川 屋上に避難できたのは何人くらいだったんですか。

戸羽 127人です。寒い中、市庁舎で一晩過ごしたんですが、次の日の朝5時くらい、これはもう救助を待っていても来ないなと思って、また津波が来たらそのときはしょうがない、と道なき道をここ(給食センター)まで歩いてきたんです。その道中で長男の同級生に会いましてね。「息子さんは高田1中に避難してますよ」と言われた。

阿川 ご子息2人の無事がわかった。

戸羽 すぐに駆けつけたかったんですが、仕事上、そうもいかない。でも、翌日の午後に叔父が息子たちを連れてきてくれたんです。泣かれると思ったんですけど、長男は「よかったー！」と。両親とも津波にやられたと思ってたらしくて。叔父が「まず俺んちに連れて行くから」と言って

くれまして、今も面倒みてもらっています。

阿川 奥様は・・・。

戸羽 私はずっと給食センターに寝泊まりしてたんですが、長男が毎日来るんですよ。で、寝る前に、安否がわからないと申し出があった人たちの一覧表を見ていたら、「戸羽久美」と女房の名前があって、探している人の欄には長男の名前があった。

阿川 自分でお母さまを探そうと・・・。

戸羽 そう、私には黙って、自分で書類を書いてね。でも、3日目くらいかな、長男は呆けたようになっちゃって。声のかけようもないくらいだったんですけど、「元気出せ！」と言ったら、「お母さんが・・・」って泣き出したんで、「バカ、お父さんだって泣きたいんだぞ」って・・・。

阿川 戸羽さんはご自分で奥さまを探しの行くのも我慢されて。結局、ご遺体が発見されたのが一。

戸羽 4月5日です。私のいとこが岩手県警の警察官で、遺体安置所に手伝いに来てたんですよ。で、彼から「久美ちゃんだと思う」と電話をもらったんです。女房は4月4日生まれなんです。その翌日に見つかった。でも、子どもには言ってないんです。

阿川 えっ、奥さまが見つかったことを？

戸羽 ええ。私は安置所で女房に会いましたけど、やっぱり時間が経ってしまっていますからね、「子どもたちには会わせられないなあ」と。見つかったと言えれば会いたがるに決まってる。でも、うちの女房は子どもっぽいやつで、息子たちときょうだいのように接していたんで、私とすればそういうお母さんのイメージを大事にしてあげたいなと・・・(涙ぐんで)。すいません。

阿川 こちらこそ・・・、すいません。

戸羽 もちろん、お母さんはもういない、ということは分かっていると思いますが、21日に葬儀をしますから、その前にちゃんと言うつもりです。

阿川 奥さまはご自宅にいらしたんですか。

戸羽 そうです。逃げる途中で津波に巻き込まれたようです。私の家は海からは結構離れているんです。もし宮城県沖で地震が起きたら、最大このへんまで浸水する、ということを示したハザードマップがあるんですが、それはちょうど私の家の前まで水が来ることになっていた。でも、私の家の裏には達しないと。ところが実際は、3階建てにうちの屋根の上に、別の家の屋根が乗ってましたからね。

阿川 想定をはるかに越えていた。

戸羽 ええ。だから、誰が悪いということもない。あの津波は私たちが想定していたものとはまるで違うものだったと言うしかないと思います。

阿川 今、陸前高田の復興についてどんな青写真を描いていらっしゃいますか

戸羽 今回の津波で一番ひどくやられてしまったところ、高田町、気仙町の沿岸部ですが、あの広い一帯をどういうふうに街づくりしていくかが大きな課題ですね。今、国や県にいろんなお願いをしているところです。でも、うちの職員にしても、やっぱり他の自治体の動きが気になるんです。だけど被災の度合いが違うから、よそと同じペースでやったらきっと見落としが出る。だから私は「見切り発車はしませんよ」と言っているんです。「陸前高田は街を修理するんじゃない、新しく街をつくるんだから、時間がかかっても『よし、この形だ』というものが決まってから進めばいい」と。

阿川 雇用の場は、どうやって回復しよう？

戸羽 私は、土下座してでもいろんな企業にお願いに回りたいと思っています。ここには、地元に残れるんなら何だってやる、と思っている人がたくさんいます。企業の側にもメリットが生まれ

るように、たとえば津波でやられた地域を提供します、そのかわり50人を雇用できる工場をつくってください、とか、いろいろやりようはありますよね。

阿川 この大震災で、腹の立つこともいっぱいあったけど、それでも私、この2カ月を見てきて、やっぱり日本人って凄い、東北人って凄いと思ったんです。最近、日本は海外からだらしなく見えているかもしれないけど、今回、日本の底力が世界に発信されたことは、本当に誇りに思っています。

戸羽 そうですね。被災地はここだけじゃありませんが、陸前高田ではたくさんの市民を亡くして、そしてここまで街が破壊されてしまった。これだけの犠牲を出してしまったからこそ、私たちには陸前高田を復興させていく責任があると思うんです。

阿川 ええ。

戸羽 市職員も皆、一生懸命やっています。彼ら自身も被災者なんですよ。295人のうち68人を失いましたし、いまだに6歳の息子さんが見つからない人もいます。でも、歯を食いしばってやってくれています。陸前高田の復興は陸前高田だけの問題じゃなく、世界の注目を集める一つの復興モデルだと思っています。だから日本中の知恵を集めていただいて、政府にも頑張ってもらって、10年、15年かかっても、心配してくださった世界の皆さんに、あの陸前高田がこんなすばらしいまちになったのかと拍手してもらえるような、そういう街にすることが、犠牲になった皆さんに対して我々ができることだし――。

阿川 市長が個人的に思い描いていらっしゃることは、何かありますか。

戸羽 実は今、ひとつ考えていることがあるんですよ。この街に、桜の木をいっぱい植えたいんです。

阿川 ヘエ〜ッ。

戸羽 3月11日は桜が咲くには早いんですけど、満開の桜を見たとき、みんながあの日のことを思い起こし、復興への思いを新たにできるように――。